

変貌するスキー界の最前線で奮闘する者たち

裏舞台の采鳴

新しい日本スキー教程 2
連載第5回

新しい「日本スキー教程」が発表された。
多くのスキーヤーに多大な影響を及ぼすと考えられる、このスキー教程の改訂は、
いったいどのような意味をもち、どのような結果を日本スキー界にもたらすのであろうか。
今シーズンの一大エポックである、新しい「日本スキー教程」の本質に迫ってみたい。

文/志賀仁郎

この号が発売され、読者の手元に届く頃、8年ぶりの全面改訂と銘打った、新しい「日本スキー教程」が発刊されるはずだ。それを手に取った人々は、それをどう感じ、どう受けとるのだろうか。この教程は、どうすればスキーがうまくなるのか、という問いに解答を与えてくれるのだろうか。

ここでは、そのテーマを先に置いて、まずなぜ今回の大改訂が行なわれたのか、そして、どういう考え方でその作業が行なわれたのかを検証してみたい。

私の手元にある、いくつかの資料をもとに、その経過を考えてみよう。

今回の大改訂の 本当の理由はなんなのか

新教程の編集に中心的な役割を果たした、S A J教育本部技術研究委員会委員長、奥田英二さんは、「月刊スキージャーナル」10月号の記事の中で、改訂が必要となった理由を次のようにあげている。

- 1、前教程と指導教本との間に理論的な整合性に欠ける部分がある。
- 2、前教程と指導教本の内容には指導法の部分で重複する部分がある。
- 3、技術用語や名称が不統一である。

この3点である。

果たして、それだけが8年ぶりの大改訂の本当の理由なのだろうか。もしそれが本当なら、その程度のことでは、前教程をじっくりと読み直して、構成の練り直し、字句の訂正をすれば済むことだ。ことさらに全面改訂というべき作業は必要なかったと思えるのだが……

1級や2級に挑戦、将来は准指、指導員を目指すという、スキーに青春を賭けた若者たちにとって、教程が変わるといことは大事件なのである。どこがどう変わったのか、そして、検定はどうなるのか。若者たちはパニックになっているはずだ。さらに、教程の持つ絶対的な権威は、日本中のスキーヤーに、極めて大きなプレッシャーを与えるはずであ

る。

もし、改訂に至る理由が、奥田さんの言うような3点であったとしたら、今回の大改訂は、日本のスキー界を混乱させるだけのものとなってしまっただろう。

私でなくとも、多くの人が、本当の理由はなにかと詮索してみたくはないはずだ。そこで、私なりにその理由を考察し、隠された真実を探ってみようと思う。

まず、前教程（現在までの教程）の問題点はなんだったのかを考えてみたい。

それはひと言でいえば、技術体系、指導理論が時代遅れて現実的でない、ということであろう。具体的には、

- 1、日本のスキー界をおおい尽くしている、55年のオーストリア教程の呪縛から脱することができていない。
- 2、教程が、指導要領であり、教科書、指導書、参考書、そして虎の巻と、あまりにも多くの性格、内容をもたされているため、混乱している。
- 3、技術が古く、新しい時代に合っていない。
- 4、文章が難解でわかりにくい。

というような点があげられる。今回の改訂は、これらの問題点をクリアするためのものであったはずなのである。奥田さんの言う改訂の理由の3点の中には、私が上げた2と4は含まれているのだが、さて、1と3はどのようなのであろうか。

新しい「スキー教程」の 新しい理念とは

再び、奥田さんの解説に戻ってみよう。

奥田さんは、「スキー教程」は技術体系を、「教本」はその技術体系に沿った指導方法を示すことになる、としたうえで、「両書が持つ内容を勉強するにあたっては、まず両書の根底に流れる『理念』をよく理解してほしいと書いている。そしてその『理念』について、次のように示している。「月刊スキージャーナル」の10月号に掲載された文章の一部を、こ

ここにそのまま採録してみよう。

「新しい『日本スキー教程』の基本的な立場として、現『日本スキー教程』が持つ理念を踏襲し、その理念を技術論、指導方法論の中で1000名生かしている」という考え方が、改訂作業のスタートの段階からありました。現『日本スキー教程』の持つ理念は、ひとことと現せば、形から質へということになります。技術のとらえ方としては、運動の表現として現われてくる形態、とくに切りかえ部分の形態に着目してターンを分類し、それを種目とし、その難易度を基準に位置づけした。それがブルックボーン、シユテムターン、パラレルターンという過程になっていたわけだ。また、現代のスキーで絶対的に求められる、ヴァリアブルスキーイングの実現を最終的な目標として掲げています。状況や条件にどのようにも対応できる可変性の高い技術。このヴァリアブルな技術の確立ということも、現『日本スキー教程』が持つねらいのひとつでした。

新しい「日本スキー教程」も、基本的にはこれと同じベースに立ちます。その上で、質からのアプローチをもう一度とらえ直す作業を加えています。現『日本スキー教程』が持つ問題点としては、種目を段階的に配列したことによる種目の順次性が挙げられます。本来の狙いとしては質を重んじているのですが、種目を配列したために、どうしても「形」から抜け出しきれなかった部分があったのではないかと、そういう反省点を踏まえています。そして、この質からのアプローチという理念を、技術論、指導方法論の中で1000名生かす切ること、新『日本スキー教程』の理解の一番大きなポイントになります。

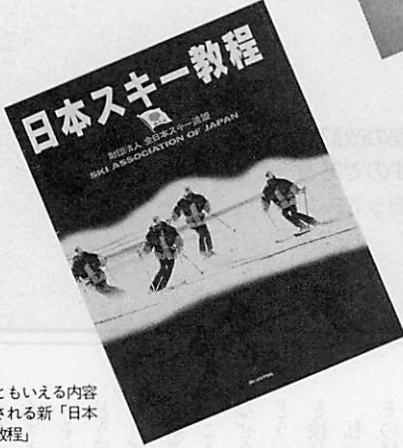
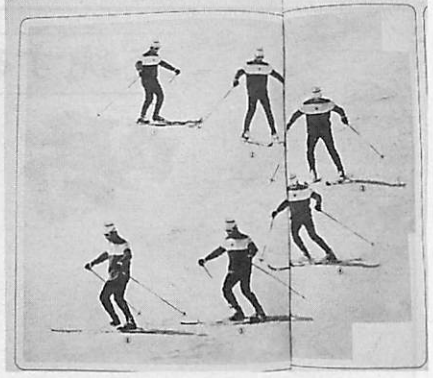
ここで述べられているのは、前教程の基本的な理念を踏襲するという宣言であるわけだが、よく読んでみると、技術をその難易度に応じて段階的に配列した、従来までの、すなわち、旧オーストリア教程に準じた方法を改めて、形より質を、との変換を計ったということが明らかにしている。

これは、まさに画期的な出来事だと言える

1971年のオーストリアの新教程中のグルンドシュブング。この技術を基礎において、パラレル、ウエーデルン、ウムシュタイクの3つの上級技法へつながる、画期的な考え方がこの教程の基本となっている



1968年アスピンの第8回インタースキーで発表されたグルンドシュブング。この初歩的なターンを洗練させて、より高度なパラレルターンへ導くと解説されていた



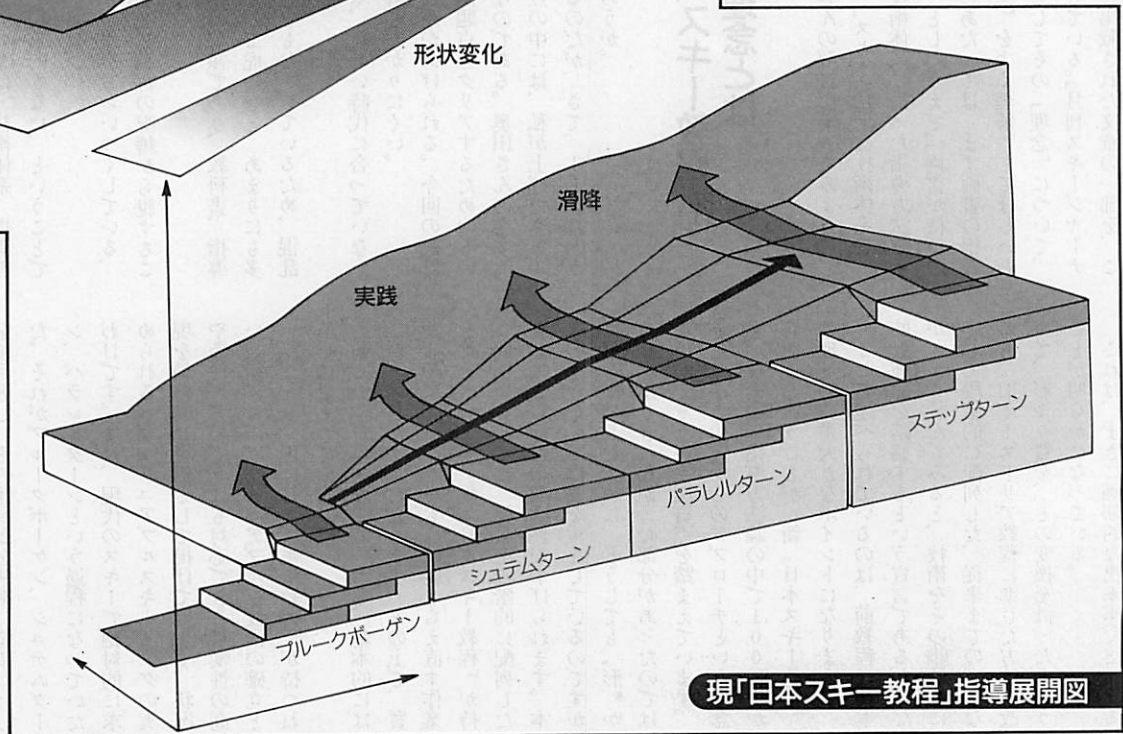
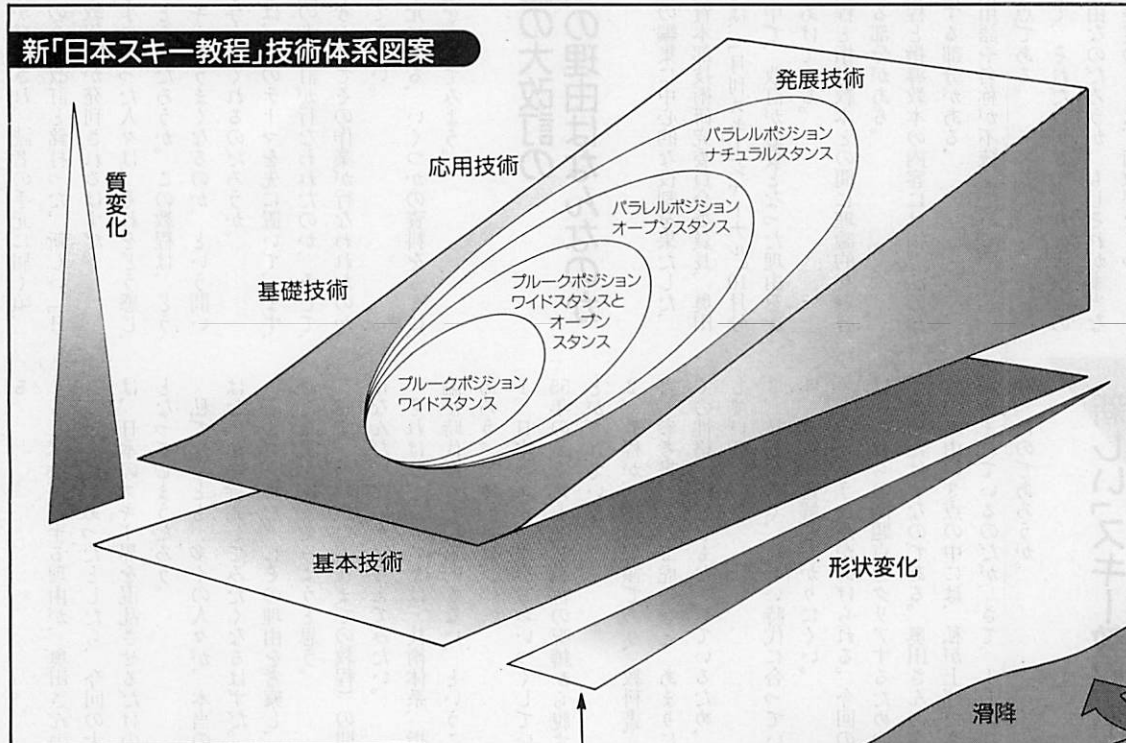
画期的ともいえる内容で展開される新「日本スキー教程」



1974年発行のスイスの教程。内容はやや古く、旧オーストリア教程の段階式指導法に近い



1974年のドイツの教程。その中でもっとも重要な技術（応用幅の広い技術）とされる基礎的なパラレルターン。日本の新教程の基礎パラレルは、こうしたターンとなっている



現「日本スキー教程」指導展開図

はすでである。
 私が前回にも、また、昨シーズンのレポートでも指摘したように、スキーの技術論、指導理論の新たな展開は、旧オーストリア教程が示した、段階的な指導体系からの脱却から発想されなければならない。そして、まさにこの「古いオーストリア教程の呪縛」からの解放こそが、新しい「日本スキー教程」の新しい理念だったのである。

新教程でのモデルの中心的存在となっているのが渡辺一樹。日本のスキーを具現化するデモンストレーターだ



今回の改訂の意味を、もっともよく理解したすべりを展開していると思われる現役デモ、志願真吾(左)と山田誠司。しかし、残念ながら新教程のモデルとしては登場していない

段階式指導法を廃した 画期的な新教程

ブルークールブルークボーゲン・シユテムシユテム・パラレルシユテム・ウエーデルンと配列して、その順に習得するという古い段階式指導が、誤りであったことは、1996年の第8回アスペン・インタースキーでのオーストリアの宣言によって明らかになったはずだが、それから25年以上の歳月をかけてもなお、世界中のスキーヤー達は、その古い教程から解放されていない。

日本も、70年代前半のわずか数年間だけ、旧オーストリアの思想からの脱出を試みた時代をもつ。しかしそれも、根強いオーストリア信仰の前に否定されて、再び、旧オーストリア的な教程へと逆もどりしていった。その経緯は前号でも述べた通りである。

段階的に技術を並べるのではない、とする今回の改訂は、段階式指導理論からトータルスキーイングへの大胆な変換が行なわれた、大きな大きな革命なのである。

その理念を解説するために、新教程に掲載される予定の図を見ていただきたい。これを見れば、新教程が段階式指導理論からの脱却を図っていることは明白だ。

現教程の構成が、ブルークボーゲン、シユテムターン、パラレルターン、ステップターンと技術を組み上げている、階段状の図によって説明されているのに対して、新教程ではブルークポジションからパラレルポジションへと技術の成熟度を高め、輪を広げていくとする考え方が示されている。

この大きな変革は、奥田さんが言う3つの改訂理由では説明できない。今回の新教程は、まさに、大きな思想の変換を意味しているはずなのだ。

なぜ、SAJは「まったく新しい理念によって、新しい教程を提案するのだ」といった解説を試みようとしなかったのだろうか。

ここに、私は、日本のスキー界の体質を見

るような気がしてならない。

日本では、何か新しいことを発想し、それを実現するためには「根まわし」、などという古い習慣がある。そして、政治家や官僚は、それをうまくやることができるかどうかで、力のあるなしを判断されるというような風土が定着している。

政治改革という名のもとで選挙制度を変える。財政改革と唱えて増税を図り、福祉税とかなんとか耳ざわりのよさそうな言葉を使って消費税を引き上げる。国際貢献などという理由で、自衛隊を海外に派兵するための口実をつくる。

こう見てくれば、日本ではなにか大きなことを運ぶとき、必ず最初にダマシが行なわれることがよくわかる。

政・官界のダマシほど悪質ではないにしても、日本のスキー界にも、そうした配慮は必要であると思われることは想像に難くない。

旧オーストリアスキーを絶対として、その理論の中で技術を身につけ、今、「先生」と呼ばれる地位をかちとった多くの人々の前に、その旧オーストリア方式を捨てた、と宣言するのは、極めて勇気のいることなのだろう。

「現教程の理念を踏襲しながら、理論的な整合性を持たせた、新しい展開を計る」(月刊スキージャーナル10月号)という、保守派の人を刺激しない言いまわしで、教程の改訂を説明する。それが日本的な根まわしのやり方なのである。

だが、段階式指導法からトータルスキーイングへの変革は、日本のスキー界が世界へ向けて発する、鮮烈なアピールであるはずだ。「日本スキー教程」は、堂々と胸を張ってその主張を展開すべきなのである。

シユテムターンは なぜ消えてしまったのか

新「日本スキー教程」の技術体系図を見た

読者は、「あれ、シユテムはどこへいったの」

といぶかることだろう。

従来、スキーを教える(スキーを習う)という行為の中で、もつとも多くの時間がかけられてきたシユテムターンの習得は、新教程ではいったいどこへいつてしまったのだろうか。

シユテムを削除した理由について、教程編集委員会は、スキーヤーを取り巻く環境が変化することをあげている。

スキー用具が目覚ましい進歩をとげ、また、ゲレンデは圧雪車などの導入によってよく整備されるようになった。スキーヤーはより早く、より高度な技術にチャレンジできるようになってきている、というわけである。そうした背景により、シユテムを廃して、ブルークボーゲンからパラレルターンへ直接導く技術の組み立て、指導の展開をしたという説明である。

ここで再度、奥田さんの「月刊スキージャーナル」10月号の記事を引用してみよう。

「ブルークボーゲンが少しずつ効率の良いターンの移行していくためには、内脚の処理が問題になります。従来は内脚の処理をシユテムターンのよって行なっていたわけですが、新しい『日本スキー教程』の技術体系では、外スキーに内脚を同調させていくことで、内脚の処理能力を高めていきます。ここが技術体系の大きく変わった点になります。具体的には、ブルークボーゲンでの滑りに慣れてくると、舵とりの後半に内スキーの角づけが弱まり、内スキーが外スキーに寄ってきます。滑走の条件を適宜変化させながら滑り続けることで、次第に両スキーが平行になる度合が高くなり、パラレルポジションに近づいてきます。このようなブルークポジションとパラレルポジションが混在する滑りを、ブルークターンと呼んでいます。しかし、このブルークターンは、シユテムターンやブルークボーゲンのように、こういう滑り方という明確な形があるわけではなく、非常に広い幅を持った技術になります。

そして同調の度合が少しずつ高まっていくと、両スキーが平行なまま、スキーと身体が

切りかえてクロスオーバーして、左右のターンの連続する基礎パラレルターンになっていきます。ブルークターンから基礎パラレルターンへの発展過程では、人間がもつとも動きやすい運動である、上下の動きを利用した雪面への働きかけを基盤に、ターンを導き出していきます。リズムの変化を中心に、滑る斜面の斜度や滑走スピードを変えて基礎パラレルターンができるように運動の質を高めていくというわけです。」

このブルークから直接パラレルターンへという発想は、1968年、アスペンのインタビューでオーストリアが発表した「赤い糸」と名づけられた論文の中に明らかにされた理論と、ほぼ同じような発想に立つ理論と言えらるだろう。

60年代後半、オーストリアは「シユテムターンのほぼど習熟してもパラレルターンのギヤップの問題に苦しめられていた。そのギヤップを解消する手段として、1966年に提案されたのが、ワウワウ(犬が吠える声)シユビングと呼ばれる練習方法だった。これは、左右への連続したブルークボーゲンからウエーデルンを導き出すという内容のものである。

さらに、1968年のアスペンでは、両スキーを平行に開いたブライトの斜滑降と、ブルークボーゲンを組み合わせた、グルンドシユビングと呼ばれる基本的なターンの技術を発表して、一気にシユテムとパラレルのギヤップの論争点を過去のものとしてしまったのであった。この、アスペンで発表された技術体系は、まさに今回の日本の新教程に共通する考え方なのである。

アスペンでの発表の際、クルッケンハウザー、ホピヒラー両教授は「スキーヤーを取り巻く環境が進歩して、こうした指導法が採用される基盤が整った」と説明した。そして「このグルンドシユビングさえ習得すれば、スキーヤーは自分のスピードで、どんなコース、どんな斜面もすべることができ、すべる距離を延ばすことで、より洗練されたパラレルシユ

ユビングを身につけることができる」と解説しているのである。

そして、その同じアスペンで日本は「立ち開きの発想」と呼ぶブルークからウエーデルンへの直接的な展開を披露している。これは、前々年に来日したオーストリアチームが残していた練習法、すなわち、ブルークから直接ウエーデルンを導き出すというワウワウシユビングを、日本人的な律儀さで日本的にアレンジしたものであった。

そのアスペンから25年を経て、そうした理論は、日本の雪の上で新たな指導理論として実現しようとしているのである。

基礎パラレルターンの身につければ、リズムを変え、スピードを変え、さらにはすべる斜面の状況を変えて練習を積むことにより、そのすべりは洗練されたものになり、より強く、より切れるものとなる。そして、すべる状況への対応の幅も広がり、スキーヤーは、形にとらわれるというまわり道をしないうで、エキスパートスキーヤーとなることができるはずである。

私は、こうしたスキー技術の組み立て、そして指導理論の展開に到達した、SAJの人々に喝采を送りたい

新教程の発刊以後に なにが起きるのか

さて、ここで冒頭にあげた問題に戻ろう。新教程は「どうすればスキーがうまくなるか」の要望に添えてくれるだろうか。

それは、日本人がスキーというスポーツをどうとらえているか、による。さらにいえば、従来のような考え方でスキーをとらえていたならば、その要望を充たしてくれることはな

いといっているだろうか。

前回私は、日本人だけがもっている技術へのこだわりが、日本のスキーを世界のスキーと違ったものにしていて書いた。

スキーは雪の山々をすべるスポーツとするヨーロッパと、スキーを小さなスペースにと

じこめて、まわる技術(ターンの技法)の習得に明け暮れる日本。この日本的なスキーに留まる限り、今回の新教程のねらいは見えてこないであろう。

グルンドシユビング(新教程でいうところの基礎パラレルターン)さえ身につければ、広い斜面に於て、長いコースをすべりながらそのすべりを洗練させることができる、という新しい教程の主張を理解すれば、あなたはきっといいスキーヤーになれるだろう。まず頭を切り替える必要があるのだ。

新しい理論は、それがどれほど立派なものであっても、日本という国ではなかなかスムーズには浸透しない。新教程も、きっと古いオジサン達にじめられるに違いない。それは、日本のスキー界が古い体質のこびりついた老人達に支配されているからなのだ。

前回にも書いたように、あのオーストリアでも、古い体質の老人達に支配されている職業スキー教師連盟からの強い圧力が、1971年教程からシユビゲンに至る教程の見直しの中で強く影響を及ぼし、その理論を逆流させた。そして1955年の旧教程は、彼らの圧力の中、昨年、完全に復活を果たしたのだった。1994年のオーストリアスキー教程は、その構成をスキーバイブルと呼ばれた旧教程そのままの形に戻ってしまったのだ。

新しいスキー教程は、野沢のインタースキーで世界の人々の前に提案される。それは多くの指導者、研究者にとって魅力のある発表となるはずだ。そしてそれは、世界のスキー界に、強いインパクトを与えるものと思われる。日本のスキー界が大きく流れを変えよう。日本のスキー界が与えてくれるとすれば、それはとても素敵なことなのである。将来、準指や指導員の資格をとるかもしれない、高い可能性をもった若者たちは、今回の新しい教程をじっくり読んで、新たなスキースポーツの世界を切り拓いてほしいものだ。

教程が変わり、検定が変わり、日本人のスキーが変わる。それはスキーというスポーツの魅力、さらに高めることになるだろう。